

雪ん子たちの冬

水野恭子

小学校三年生になる娘に、「冬っていったら、何を想像する？」と聞いてみました。娘は即座に「雪」と申しました。十二月末から三月半ばまで雪にうずもれるこの地方（越後高田は日本一の豪雪の記録を持っています）に住んでいれば、冬とは、まさに雪そのものなんでしょう。

十一月、実りの秋の取り入れが終わり、山々が美しく紅葉してくる頃から、大人たちは雪への準備を始めていきます。男達の仕事は冬囲い。庭の樹々を竹と縄で上手にくるんで

いきます。一本一本に杭を打ち、竹を立て、まとめて縛り上げていく作業はなかなか骨のおれるものです。大きなガラス戸や玄関のポーチなども落とし板などで囲っていきます。女達は漬け物作りや衣類の準備です。昔のように交通がマヒして食べ物が入らなくなるということが、まずなくなった今日、越冬用の食物準備はほとんどいらなくなり、いつでも必要なものが買えるようになりました。どんなにか楽な暮らしになったでしょうか。それでも、この季節を逃すと、蒲団干しなどは春までできませんから、暖かい日に大根と並んで蒲団が干されている光景をよく見ます。

そして十二月、雨がみぞれやあられに変わりかける頃、人々は急に無口になります。長い冬を思うと誰しも憂鬱になってしまうのです。そして、ついに初雪。一面が銀世界になると、人々はまたおしゃべりをしだします。「降ってきましたね。」「これ位で止まればいいんですけれど。」等々。雪の話が挨拶のかわりになります。その時の顔には、諦めに似た一種独特の清々しさがあります。

大人たちの心とは裏腹に、雪が降って大喜びなのは子ども達。ワイワイといつも以上に賑やかに雪の中を登校していきます。色とりどりの防寒ブーツや長靴をはき、アノラックを着て、サクッサクッと歩く足どりは本当にほがらかです。子どもはまさに雪ん子そのものなのかもしれません。

雪がどんどん積もっていくと、もう雨傘をさす子はほとんどいません。雪は雨と違って、アノラックの下までびっしょりになるほど濡れることはないし、第一、雨傘の上に雪

が溜るので、とても重くて何度も払わなければならないことは、子どもには面倒なのでしよう。それに積雪で狭められた道を傘の行列が歩いては、車がうまく通れません。そんなこんな理由から、子ども達の服装はいつのまにか限られていったのだと思います。

昔のわらくつにごさぼうしという姿は町の中では今は見ることはできません。大人のかくまき（一枚の毛布のような布をおる外着）もほとんどが消えてしまいました。根強く残っている昔ながらの冬の衣類といったら、室内用のはんてん、ちゃんちゃんこでしょうか。綿の入ったこれらの上着は暖かく、肩が凝らず、しかも着やすく、手放せない一枚なのかもしれません。

さて、視点を雪の上の子ども達の上に戻しましょう。学校から戻った子ども達は、実にいろいろな遊びを展開してくれます。子どもらは遊ぶ時は、必ずズボンの上にオーバーズボンを着用し、手袋をしっかりとつけて集まってきます。長時間雪の上で転がって遊ぶには、それが最適だからです。

他の地方の人も容易に想像できる遊びの第一がスキーです。もちろん家の回りでの遊びですから、山スキーとは大部趣が異なります。除雪のしていない小路の起伏の上で滑走したり、雪おろし後の雪山の上から滑ったり、田んぼの畔道のスロープを滑ったり、自然にできたスロープを上手に捜して滑ります。そのためには、スキーが体の一部になっていかないとうまくいきません。歩き始めるとすぐにスキーをはく雪ん子達には、それがごく自然な成り行きなのです。スキーはスポーツであり、高度な技術が必要だと悟ってしま

ったり、やれフランス式だ、スイス式だと型にとられていくのは大人の話であり、子ども達には関係のないことなのです。

最近、スキーよりも人気が出てきたのが、そり滑りです。スノーボードといわれる遊具に大小いろいろな種類が生まれ、普及しています。子どもらは自分の体にあつたスノーボード一つ持ってくれば、スキー靴もストックもいらず、簡単に楽しめるようになりました。道具が手軽で安価、かつ、バランスをとって坐っていればできるという簡単さは、特に低年齢の子ども達を雪に誘ってくれました。歩き始めたばかりの子をひょいと乗せて、親が引っ張ったり、緩いスロープをいっしょに降りたりする姿もよくみかけます。小学生も低中学年位までの子どもは好んで乗るようにみえます。

スロープの話が出て来た所で、どうしても雪おろしのことにふれなければと思えます。雪おろしとは、屋根の上に積もつた雪を取り除いてみる作業のことです。七十センチメートルの積雪は一トンという重さになると聞きます。ほっておけば、三メートルにもなる積雪をそのまま屋根の上に置いておいたら、家がべちゃんこに潰れてしまいます。現に昨年のどか雪は、多くの家で雪おろしが追いつかず、梁が折れたり、軒先にせり出した雪庇の重さで軒が折れたりして、多くの被害がありました。我家も、夜中にピンツという音（弱い部分にひびが入った音）を聞き、あわてて雪をおろしましたが、やはり、春、雪どけを待つて柱を一本補強しなくてはならないになりました。どか雪は、とにかく一晩で一メートルもの積雪をもたらします。自分で自分の家を守らざるをえないのです。

町並が続く市の中心部の雪おろしは豪快です。市からの指令で日時を切って一斉に道路に雪がおろされていきます。道路はあつという間に三メートル以上の雪の山になります。人々はがんぎの下を歩くしかなくなり、そんな日が丸一日、二日目からは道路の排雪が行われます。パワーシャベルでトラックへ次々と雪が投げ込まれ、それが堀や川に捨てられていきます。それが二日間。四日目の朝には交通マヒがうそのように消え去ります。

けれど住宅地はそうはいきません。雪おろしされた雪は春までそのまま、消えるのを待つしかありません。又、道路も排雪ではなく除雪（雪を道の両側によける）のため、道路に積もった雪まで小路に入っつき、その山といったら大変です。庭がないと、本当に困るのです。

ところが、子ども達にとっては、雪おろしはとても嬉しい日です。年長の子は、お手伝いに汗を流しながらも楽しんでます。何せ、軒の高さと雪の高さが同じになり、しかも固くしまった雪ですから、乗って埋まることもありません。急に住む世界が高くなった感じがして、いい気分なのでしょう。それに、雪おろしが済めば、その高い山々は自分達の世界になります。子ども達のワクワクとした心の動きが、雪に疲れた大人達にとって、どんなにか慰めとなるでしょうか。

こうしてできた雪山で、スキーにそりに、一汗流した子ども達が次に始めるのは大抵雪穴ほり。横にほればかまくらになり、縦にほれば落とし穴になります。この落とし穴は不思議なことに田んぼや空地のまん中にほられます。ですから、決して誰も落ちないので

す。落ちて楽しむのは自分だけ。きつと、ほることそのものが嬉しいのでしょう。もつとも、ほろうと思っても道路の雪は固すぎて、子ども達の力には余りますが。

かまくらはままごと遊びの出発点になります。秋田の方では、このかまくらで餅を焼いて食べるといいますが、越後高田にはそうした風習はありません。あくまでかまくらは遊びの一つなのです。

ままごと遊びで一番おもしろいのは、雪おろし後等の固い雪の上に三十センチメートル位の新雪がのっかった日です。子ども達は新雪を踏んで部屋を作ったり、廊下を作ったり、道を作ったり、一面の大地に大らかに場面を作っていきます。そして、時にはきれいな色水を持ってきたりして、細々としたお料理作りも展開されていきます。手や足が寒さでしびれ、鼻水をたらしていても、この遊びを止めようとしません。それほどにダイナミックで楽しいのです。夏場の砂遊びが、まっ白できれいな雪に変わり、かつ汚して叱られることなく大地いっばいに展開されると考えて頂ければ、その醍醐味は想像して頂けるのではないでしょうか。

屋外での遊びで冷えきった子ども達はやがて家の中に入ってきます。「まあ、こんなにビショビショになって」と言いわれながらも、暖かい部屋で着替えが終わる頃には、ほつべも手もポカポカと暖かくなっています。そして家の中の遊び、これはきつと他の地方と大差はないのではないでしょうか。絵を描いたり、本を読んだり、ゲームをしたり、何かを作ったり……。

雪国の夜は音もなく更けていきます。すべての音が雪に消され、あまりの静けさに障子を開けると、大きなぼたん雪が降り続けているのです。

三月の春一番が吹く日まで、雪の中、平和な日々です。あまりに大きすぎる「雪」という自然の前で、人々はただ頭を垂れ、じっと春を待つしかないのかもしれない。

ああ、春よ来い。早く来い。そして、「雪とけて村いっばいの子どもかな」（一茶）やっばり土がいい。かげろうのもやもやあがる春を大人も子どもも待っているのです。

（新潟県上越市在住）

*

*

*